

## 訳注『黄石齋集』第一集（6）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2024-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小財,陽平 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/0002000484">http://hdl.handle.net/10291/0002000484</a>

# 訳注 『黄石齋集』 第一集 (6)

小 財 陽 平

0118 庚戌元日 (庚戌元日)

笑語団欒椒酒新

しょうご だんらん しょうしゅあら  
笑語団欒 椒酒新たなり

一家無恙旧時春

いっか つがな  
一家恙無し 旧時の春

所嗟百事皆瓠落

なげ とつら ひやくじ みなかぐらく  
嗟く所は 百事皆瓠落して

双鬢今朝四十人

そうびん こんちよう しじゅう ひと  
双鬢今朝 四十の人

七言絶句 韻字 新・春・人 (上平声十一真)

【題意】 嘉永三年元日の作。不惑の年齢になった感慨を詠じた。

【語釈】 ○椒酒 山椒や種々の生薬を調合した酒。正月を祝うための酒。屠蘇。 ○旧時春 かつて迎えた春。今年

もいつもと同じ正月だということ。 ○瓠落 ぼろぼろ欠けて落ちること。五石もある大きな瓢に水を汲み入れよ

うとしても、「瓠落して容るる所無し」、ぼろぼろと欠けて使い物にならなかつたという『莊子』逍遙遊の記述を踏

まえる。

【通釈】 家族団居して笑い語りながら、新年の屠蘇を口ににする。一族つつがなく、いつもどおりの新春を迎えた。なげかわしいのは、万事がぼろぼろと欠け落ちるようになく、白髪頭の四〇の年を迎えたことである。

0119 開春二日游芹水莊（開春二日、芹水莊に遊ぶ）

暗黄著柳嫩煙浮

暗黄 柳に著きて 嫩煙浮かぶ

好作開春第一游

好し開春第一の游を作さん

遠障未全回故翠

遠障 未だ全くは故翠を回さざるも

前川早已帶新流

前川 早くも已に新流を帯ぶ

雖然醉興把餘適

然く酔興餘適を把ると雖ども

其奈吟懷添老愁

其れ奈んせん吟懷老愁を添ふるを

寄語東風莫催喚

語を寄す 東風催喚する莫かれ

鬢糸漸覺対花羞

鬢糸 漸く覺ゆ花に對して羞づるを

七言律詩 韻字 浮・游・流・愁・羞（下平声十一尤）

【題意】 嘉永三年一月二日の作。芹水莊に遊び、この年の出初めを楽しんだ。

【語釈】 ○暗黄著柳 浅黄の新芽が柳に芽吹いた。李賀「河南府試十二月楽詞并閨月 正月」に「暗黄柳に著きて

宮漏遅たり」とあるのを踏まえた。○嫩煙浮 うつすらとした春の霞が浮かぶ。韋莊「春陌二首（二）」に「嫩煙

軽く染む 柳糸の黄」。○開春 年のはじめ。○故翠 落葉するまへの木々の緑。○新流 春の水どけによつ

て生じる、あらたな水の流れ。魏収「棹歌行」に「雪溜春浦に添へ、花水新流足し」。○餘適 十分なゆとり。白居易「老熟」に「何ぞ乃ち 餘適有らんや、祇だ過求無きに縁る」。○寄語 もしもし。呼びかけの言葉。○催喚 呼び立てる。こちらに来るようにうながす。春風が春を呼び込むとみなした。○鬢糸 白く細くなった髪の毛。○対花羞 花に對して、老いたわが身が恥ずかしい。蘇軾「吉祥寺賞牡丹」に「人老いて花を簪し自ら羞ぢず、花心に老人の頭に上るを羞づるなるべし」とあるのは、老人は花を簪しても恥ずかしがらないが、かえって花のほうが老人の頭に載せられて恥ずかしいだろう、というもの。これを意識して、さすがにかかる「鬢糸」では花をまえに恥ずかしいきもちになったということ。

【通釈】 浅黄の新芽が柳に芽吹き、春のうっすらとした霞が浮かんでいる。よし、新年の出初めに打ってつけた。遠くの峰はかつての木々の緑を取り戻しきつてはいないが、前方の川には早くも雪解けの新しい流れができています。こんなふうには酔っ払ってゆつたりとした時間を過ごせるといっても、詩人の胸の内に老いの愁いがふくらむことはどうしようもない。もしもし、春風よ、春を呼び立てるのはやめておくれ。糸のように細くなった白髪の毛として、花に對して恥ずかしいきもちがだんだんと湧いてくるから。

【余説】 大沼枕山は「山猶臘色、水已春意、以貼開春二字。後聯言情、不必拘拘於時節。古人律法、多皆如此。吾邦近人不認之、何懵者多也（山猶ほ臘色にして、水は已に春意、以て開春の二字に貼す。後聯情を言ひて、必ずしも時節に拘拘せず。古人の律法、多くは皆な此の如し。吾が邦の近人之を認めず、何ぞ懵なる者の多きや）」と評している。前聯は「開春」の景を詠じて、後聯では老愁の情を述べるといふ本作が、律詩の構成法に適合していると称した。小野湖山は「字鍊句烹、不肯苟作（字鍊句烹、肯て苟作せず）」と述べて、字句がよく鍊磨されていて、けっしてかりそめに詠出しない黄石の作詩姿勢を評価した。

0120 与小原鉄心游濠梁園 (小原鉄心と濠梁園に遊ぶ)

可比当年莊惠游 ひすべし とうねん 莊恵の游

与君半日俯清流 きみと はんじち せいりゅう に 俯す

世間無限駭機事 せいけん 無限 なし 駭機 の 事

不到逍遙濠濮頭 いたらず 逍遙 濠濮 の 頭

七言絶句 韻字 游・流・頭 (下平声十一尤)

【題意】 嘉永三年春、小原鉄心と濠梁園に遊んだときの作。小原鉄心(一八一七〜一八七二)は、大垣藩士小原忠行の息。藩主戸田氏正の命により、藩政改革に着手するなど、藩士としての功績を挙げた。濠梁園は、宇津木氏

勤王家としても知られ、幕末の動乱期には藩を新政府側に導き、維新後は朝廷に召された。濠梁園は、宇津木氏(黄石の実家)の別荘で、旧犬上郡地区(現彦根市平田町)にあったが、明治二年、この地に彦根製糸場が建設された。横田竹泉「彦根雜詠 平田製糸場」(『江州郷友会雜誌』五、一八八九・一一)の題下注に「地旧係藩老宇津木

氏別墅。称濠梁園。嘗聞、主人風流好客、吟詠殆無虚日。毎三日、大会諸文士、以張流觴之宴云。撤藩後、開製糸場。蓋因其有清流也(地は旧と藩老宇津木氏の別墅に係る。濠梁園と称す。嘗て聞く、主人風流にして客を好み、吟詠殆ど虚日無し。毎三日、大いに諸文士を会して、以て流觴の宴を張ると云ふ。撤藩の後、製糸場を開く。

蓋し其の清流有るに因るなり)」とある。これによれば、濠梁園は平田川のほとりにあったようで、黄石は鉄心とともにその清流を愛でたのだろう。濠梁園の名は、『莊子』秋水に見える、莊子・恵施が濠水で交わした対話したこと

に由来する(【語釈】参照)。

【語釈】 ○当年 その当時。 ○莊惠游 莊周(莊子)と恵施(恵子)がなした、濠水での逍遙。「濠梁」(濠水の

梁やま、あるいは濠水に架かる橋とも)のあたりをふたりで散策したとき、鯿魚おとこが楽しそうに泳いでいるといった莊子に対して、魚になったわけでもないのに、どうして魚が楽しく泳いでいるかどうかがわかるのかと問答した「知魚楽」の故事(『莊子』秋水)を踏まえる。恵施は戦国宋の人で、梁の宰相となって、莊子としばしば談論した。ここでは、黄石・鉄心を莊子・恵施に擬して、ふたりで魚でも見ながらゆったりと話して過ごした、ということ。濠梁園ちんに因ちなんだ措辞。○清流 清らかな川の流れ。莊子・恵施が散策した「濠梁」のことをいうが、ここでは平田川を指す。○駭機 突然発射される弩機(クロスボウ)のこと。転じて、突発的におとずれる災厄をいう。多く煩雑な俗事を指す。陸游「野飲」に「人生は憂患の窟、駭機日夜作る」。○逍遙 散策することだが、『莊子』の篇名・逍遙遊を響かせた措辞。○濠濮 濠水と濮水。濮水で釣りをしていた莊子は、楚の政治を見るよう願ひ出た使者に対して、振り向きもせず断つたという故実(『莊子』秋水)がある。これ以降、濠水・濮水は、簡文帝(司馬昱)が「会心の処は必ずしも遠きに在らず。翳然たる林木、便すなはち自おのづから濠濮の間の想ひ有り。覺えず鳥獸禽魚自ら来たりて人に親しむ」(『世説新語』言語)といったように、世俗を離れた、自由で静かな水辺の地を指すようになった。なお、「濮」は底本に「濶」に作るが、私に改めた。

【通釈】かつて濠梁で遊んだ莊周と恵施になぞらえられよう。あなたと清らかな流れを見て過すごしたこの半日間は。世の中には驚くべき災厄が突発的におとずれるが、この濠水や濮水のほとりにまではやってこないのだ。

【余説】小原鉄心の『鉄心遺稿』巻六には「遊黄石岡本君濠梁園。君有詩見示。次韻却贈」と題する七絶がある。この作は、「游」「流」「頭」で押韻していて、黄石詩とは次韻の關係にある。詩題といい、韻字といい、これが黄石の詩に韻を次した作と見るのが妥当であるが、残念ながら鉄心の詩は文久二年作のところ収録されていて、嘉永三年の作とすべき黄石詩とは制作時期が合わない。両者は嘉永三年と文久二年の両度にわたって、濠梁園に遊び、同

じ韻字を用いて作詩したのか。あるいは、どちらかの詩集に何らかの事情で誤った制作時期の作が混入した可能性もある。なお、両作については、徳田武『小原鉄心と大垣維新史』一七九〜一八一頁（勉誠出版、二〇一三）に言及がある。

大沼枕山は「鉄心飲要巨觥、君之飲在蕉葉。鉄心之詩豪放、君之詩精警、其人之異、多類於是。而交情如莊恵。実可謂奇矣（鉄心の飲は巨觥を要し、君の飲は蕉葉に在り。鉄心の詩は豪放、君の詩は精警、其の人の異なる、多く是に類す。而して交情は莊恵の如し。実に奇と謂ふべし）」と評している。両者の飲み方、詩風は異なるのに、篤い交誼を結んでいたことに感嘆したのである。

0121 田中芹坡自京帰過訪。時余病起（田中芹坡京より帰りて過訪す。時に余病より起つ）

花落門庭景氣真

花落ちて門庭景氣真なり

忽然重接旧交親

忽然として重ねて接す旧交親

眼中喜子青如故

眼中喜ぶ子の青きこと故の如きを

鬢上嗟余白漸新

鬢上嗟く余の白きこと漸く新たなるを

竹月一簾春作夢

竹月一簾春夢と作り

松風半榻夜無塵

松風半榻夜塵無し

留歡好把墜歡補

留歡して好し墜歡を把て補はん

病負芳時弥数句

病みて芳時に負くこと数句に弥る

七言律詩

韻字 真・親・新・塵・句（上平声十一真）

【題意】 嘉永三年春、京都に遊学していた田中芹坡が、黄石を訪うたときの作。このとき黄石は病氣から回復したばかりであった。芹坡の上京を送った作は、0081詩を参照のこと。

【語釈】 ○景気真 飾り気がなく、自然そのままの情景。花が散って、いつもと変わりのない景色。 ○青如故 眼

の青さは以前のままだ。阮籍は氣に入ったものは青眼で迎えたが、俗人には白眼でもって対峙したという「阮籍青眼」（『蒙求』）による。 ○竹月 竹林の上に昇った月。 ○半榻 長椅子の半分のことだが、「一簾」と対句にするために「半榻」といったのであり、たんに長椅子と考えればよい。徐彦伯「閨怨」に「塵埃半榻に生ず」。 ○

留歡 客を留めて酒宴の席を設けること。 ○墜歡 かつての楽しみ。花が落ちるまえの春の楽しみ。 ○芳時 花盛りの時節。 ○数旬 数十日。

【通釈】 花が散って、家のあたりは代り映えしない景色が広がっている。と、不意にふたたび古なじみが来訪してくれた。あなたの眼が以前のとおり青色であることをうれしくおもうが、わが鬢の毛がようよう白くなりゆくことはさびしいばかりだ。竹林に昇る月が簾に透かし込むこの春は夢のようににはかなくて、松を渡る風が長椅子を吹く今夜は塵一つない。客人を引き留めて酒席を設けたのは、過ぎ去った春のよるこびを取り戻したいがため。病臥してもう数十日も花ざかりの時節に負っていたのだから。

【余説】 大沼枕山は「腹聯写竹月松風、曲尽姿韻。亦麗亦清（腹聯竹月松風を写して、姿韻を曲尽す。亦た麗亦た清なり）」と述べて、頷聯が「竹月」「松風」の姿貌を的確に描き出し得ていることを評価している。小野湖山は「老成沈着、其情自深（老成沈着、其の情自ら深し）」と評している。



0122 送大塚菓南還越後（大塚菓南の越後に還るを送る）

旅食十年夢故関 りょしょくじゅうねんごかんゆめ

今朝真詠大刀環 こんちようまことえいだとうかん

適毫近捲太湖水 しゅうごうちかまはたくうのみづ

壯氣重凌三越山 さうきかえりさんえつやま

江路鵬声残月外 かうろけんせいざんげつそと

駅亭樹色乱雲間 えきでいじゆしよくらんうんあいだ

此行有勝買臣錦 このこうばいしんにしきまをみるあり

持得滿囊珠玉還 まんのうしじゆぎよくまんのう

七言律詩 韻字 関・環・山・間・還（上平声十五刪）

【題意】 嘉永三年初夏、長らく彦根に住していた大塚菓南が越後国柏崎に帰郷するのに寄せた作。『越佐名家著述目録』によれば、大塚菓南は、名は紳、字は佩玉、通称は六郎で、菓南はその号である。本姓は水落。桑名藩主の侍

医で詩人の水落雲壽は、その兄である。著に『菓南遺稿』があるという。

【語釈】 ○十年 おおくの期間。かならずしも実数とはかぎらない。 ○故関 古い関所。柏崎には、戦国期に作ら

れた鉢崎関所があった。関所をもって故郷の象徴とし、望郷の思いを抱いていたということを表示した。「関」が韻

字であったことによる措辞。 ○大刀環 刀の柄につけた、大きな飾りの輪。刀環。「環」が「還」に音通すること

から、故郷に帰ることを意味する。前漢の霍光が匈奴に降った李陵に目配せしながら刀環をまわして、漢に帰るよ

う暗に促した故実（『漢書』李陵伝）に由来する表現。 ○適毫 いささか解しにくい。「適豪」であれば、豪放な

性質を指す語として意味が通る。さしあたり「適豪」として解しておく。○捲 巻き上げる。琵琶湖の水を巻き

上げるような豪壮な様のこと。○太湖 中国江蘇省南端の湖。ここでは琵琶湖を指す。○三越 越前・越中・

越後。菓南の目指す柏崎は越後国にある。中国では、呉越・閩越・南越を総称して三越という。琵琶湖を「太湖」と称したのに合わせて、中国の地名にも取れるようにこう表現した。○鵲声 ホトトギスの啼き声。初夏の景物

であるとともに、その啼き声が「不如帰去」に聞こえるとされるために、望郷の念を喚起するものとしても用いら

れている。○買臣錦 朱買臣の着用した錦の衣。前漢の朱買臣は貧乏暮らしのために妻に去られたが、その後、出世して故郷に錦を飾ったという「買妻恥醜」(『蒙求』)を踏まえる。○満囊珠玉 袋いっぱいすぐれた詩稿。

李賀は、奚奴(従者)に古くて破れた錦の袋を背負わせて景勝地を巡り、詩歌ができるとその袋(奚囊)に入れていったという『唐詩紀事』の故実に拠る。珠玉は宝玉のことだが、転じてすばらしい詩文をいう。杜甫「奉和賈至

舍人早朝大明宮」に「詩成りて珠玉揮毫に在り」。

【通釈】あなたは、一〇年もの旅暮らしのなか、故郷の古い関所を夢に見てきたが、今朝、帰郷の歌をまことにうたうにいたったのである。近いところではその豪胆さで琵琶湖の水を巻き上げんとするし、重ねては雄壮な氣勢によつて三越の山々を凌いでいこうとされている。川べりの道ではホトトギスが残んの月の向こうで啼き声を挙げ、宿場の樹木は乱れ動く雲の間にそびえていることだろう。この帰省の旅は、故郷に錦を飾った朱買臣にも勝るものがあるだろう。奚袋いっぱいすぐれた詩文をたずさえて帰郷されることである。

0123 夏夜即景(夏夜即景)

何来片雨逐雲晴

何来からいの片雨へんう雲くもを逐おひて晴はれ

樹杪銀湾滅復明 樹杪じゆびようの銀湾ぎんわん滅復めつふたた明めい

一夜虚窓人在水 一夜いちや虚窓きょそう人水ひとみづに在り

風枝残滴月中声 風枝ふうし残滴ざんてき月中げつちゆうの声こゑ

七言絶句 韻字 晴・明・声（下平声八庚）

【題意】 嘉永三年夏の作。月下の湖岸の夜景を詠じた。

【語釈】 ○片雨 通り雨。いっぽうでは晴れ、かたほうでは雨が降っている状態。岑参「晚発五渡」（『三体詩』）に

「江村片雨の外」。 ○樹杪 木のこずえ。 ○銀湾 天の川。李賀「溪晚涼」に「銀湾曉に転じて 天東に流る」。 ○一夜 今夜。一晚中。高適「塞上聞吹笛」（『唐詩選』）に「風吹きて 一夜 関山に満つ」。 ○虚窓 人

気のない窓辺。白居易「北窓閑坐」に「虚窓 両叢の竹、静室 一爐の香」。 ○人 黄石を指す。 ○在水 水のな

かにいるようだ。窓が見える天の川、月光、残滴の音、これらの環境が、あたかも水中にいるかのように感じられ

たということであろう。趙嘏「江楼書感」（『唐詩選』）の「月光 水の如く 水天に連なる」など、月光を水に譬える趣向はめずらしくない。表現としては、「蒹葭」（『詩経』秦風）の「遡游して之に従ひ、宛として水の中央に在り」などを意識するか。 ○風枝 風に吹かれて音を鳴らす枝。 ○残滴 木の枝や葉に置いた雨のしずく。

【通釈】 どこからともなくやってきた通り雨が、雲を追いかけるようにして過ぎ去ると、枝々の隙間からは天の川がちかちかと輝いて見えた。今夜、ひっそりとしたこの窓辺にいと、あたかも水のなかにいるようだ。風に葉を揺らす枝や落ちてくる雨粒の音が、月明かりのなかで鳴っている。

0124 送青根九江再之上都（青根九江の再び上都に之くを送る）

客年かくねん 帰占かへ 旧漁きゆうぎょ 艘ふね  
きゆうぎょ 客年かくねん 帰かへ 占お 旧漁きゆうぎょ 艘ふね

又また 逐お 賓ひん 鴻こう 向む 上じょう 邦ほう  
また 又また 賓ひん 鴻こう を 逐お ひて 上じょう 邦ほう に 向む かふ

遺い 憾かん 不ふ 饜わん 鱸ろ 膾かい 膾かい 美み  
い 遺い 憾かん なり 饜わん 膾かい の 美み に 饜わん かずして

秋風しゅうふう 時節じせつ 出家かこ 江え  
しゅうふう 秋風しゅうふう の 時節じせつ に 家江かこ を 出い づ

七言絶句 韻字 艘・邦・江（上平声三江）

【題意】 嘉永三年秋の作。一年ぶりに京都に向かう青根九江（一八〇四～一八五四）を送った。九江は、彦根藩主御用の茶屋の子として生まれたが、山本梅逸門の画家として、京都で活躍した。

【語釈】 ○帰占 帰隠して、その地を自分のものとする。陸游「閑遊四首（一）」に「廬を結び 帰りて占む 水雲の郷」。○旧漁艘 古い釣り舟。釣り人は隠者を象徴する。ここでは、九江が帰郷して、世俗を脱した生活をして

いたことをいう。○賓鴻 飛来するガン。「鴻」はガンの大きいもの。『礼記』月令に「鴻雁 来賓す」。ガンは晩秋に北方から南へ帰ってくるので、九江がガンを追いかけて上京したといった。○上邦 京都。「上国」に同

じ。○饜 飽き足りる。満足するまで食べることに。○鱸膾 イサザのなます。「鱸」はスズキ目ハゼ科の淡水魚で、琵琶湖の固有種を指す（0065詩参照）。いわゆる「スズキ」のことではない（0021詩で「鱸尊」を

「スズキのなますとジュンサイのあつもの」としたのはあやまり）。晋の張翰が秋風の起こるのを見て、「蓴羹鱸膾」という故郷の味を思い出し、そのまま役人を辞めて帰郷した「張翰適意」（『蒙求』）以降、郷愁を誘う故郷の料理を

いう。○秋風時節 秋風の吹く季節。「張翰適意」の故実を効かした表現。王禹偁「寄潘閩処士」に「秋風の時節に鱸魚を憶ふ」。○家江 生家の近くの水辺。ここでは琵琶湖をいう。

【通釈】 去年、帰郷して、琵琶湖のほとりでなじみの釣り舟をうかべていたかと思っていたら、今度はガンを追いかけるようにして京都に出立するのだという。残りおいしいことだ、郷里の美味を堪能しないまま、秋風の吹きはじめの時節に湖畔の生家を発ってしまうのは。

0125 食西瓜（西瓜を食す）

一団碧月上盤香 いちだん せきげつ ばん かにば

剖作紅氷澆熱腸 わ くりて せうひょう と して ねつちよう せそ

冷潔將同金掌露 れいけつ ます おな きんしょう つゆ

濃甘或似帝台漿 のうかん ある に 似たり たいたい じよう

詩家旧有剪霞法 し か も あり せんか ほう

仙客新伝餐玉方 せんかく あら につた さんぎよく ほう

此際文園消渴叟 こ さい ぶんえん しょうかつ そう

也応滿腹飽清涼 ま たい ます せいりよう ほう

七言律詩 韻字 香・腸・漿・方・涼（下平声七陽）

【題意】 嘉永三年秋の作。スイカを賞美して作った。スイカは、一六世紀後半〜一七世紀前半頃にその種子が渡来し、元禄期以降は、食用として普及した。

【語釈】 ○碧月 あおみどり色の月。 ○熱腸 腸が煮えくりかえることをいうことが多いが、ここでは夏の暑さに弱った腹内を指す。 ○金掌露 金掌（前漢の武帝が建章宮に建てた承露盤。仙人掌とも）に溜まった甘露。甘露

を飲むと、不老長寿の効を得るとされた。スイカの果汁を擬した表現。張九齡「和許給事直夜簡諸公」（『唐詩選』）に「樹には揺らぐ金掌の露」。○帝台漿 帝台という神が飲んだという漿。「東南五十里、高前の山と曰ふ。其の上に水有り、甚だ寒にして清し。帝台の漿なり。之を飲む者心痛あらず」（『山海經』中山經）。○剪霞法 朝焼けの美しい綾を切り取って、詩歌の表現に用いること。盧寧「燕山行樂圖歌」に「霞を剪りて賦を續げば句還た工なり」。○餐玉方 玉を食らう方法。古来、仙家が玉を削って食すると、寿命が延びるとされた、その方術のこと。ここでは、スイカを宝玉に見立てた。○此際 このとき。スイカを存分に味わったとき。唐彦謙「蒲津河亭」（『三体詩』）に「郷を思ひ古を懐ひて多く別れを傷む、此の際哀吟幾ど勝えず」。○文園消渴叟 口が渴き、痩せ細った老翁。前漢の司馬相如をいう。司馬相如は文園令（前漢の文帝の陵園である孝文園を取り仕切る長官）となったが、消渴の疾（いつも口が渴く糖尿病の症状）によって閉居していた故実に拠る。戯れにみずからを司馬相如に言いなしたのである。

【通釈】 あおみどり色の満月が大皿に載ってかぐわしい香りを放っている。割って紅の水にして、暑さに火照ったはらわたに注ぎ入れる。そのさっぱりとした冷たさは、金掌の甘露と同じようなもので、濃厚な甘さは、帝台が飲んだという漿に似ていることだろう。詩人にはもともと剪霞の法がそなわっているが、今般あらたに餐玉の仙術が伝えられた。これさえあれば、口が渴いて仕方のないあの老相如も、このさわやかで冷たいものを腹一杯にかき込んで満足するにちがいない。

【余説】 小野湖山は「碧月紅氷、下字皆妙。不陷謝瞿詠物窠白（碧月紅氷、字を下すこと皆妙にして、謝瞿の詠物の窠白に陥らず）」と評している。「碧月」「紅氷」などの表現が、謝宗可や瞿佑といった詠物詩を得意とする詩人の作品を剽襲したものでないことを評価したのである。大沼枕山は「鮮麗細緻、元人之工手、應讓一著（鮮麗細緻、

元人の工手も、応に一著を譲るべし」と評している。

0126 訪渡辺楠亭湖上幽居三首（渡辺楠亭の湖上の幽居を訪ふ三首）

故人家在水西村

故人家は水西の村に在り

一路晴沙带雨痕

一路の晴沙雨痕を帯ぶ

蘆葉荻花秋正好

蘆葉荻花秋正に好し

釣舟横処認柴門

釣舟横たはる処柴門を認む

七言絶句 韻字 村・痕・門（上平声十三元）

【題意】 嘉永三年秋の作。琵琶湖畔の渡辺楠亭の隱宅を訪問したときの作。渡辺楠亭（一八〇〇～一八五四）は、近江坂田郡の人。独学で朱子学を修め、湖岸の自宅で門弟に教えた楠亭のもとには、彦根藩士をはじめ、数百人が参集したという。

【語釈】 ○故人 老友。楠亭のこと。 ○水西村 水の西側にある村。楠亭は坂田郡の人だから、その自宅は琵琶湖

の東側に位置するはずである。 ○晴沙 明るい光に照らされた砂辺。楠亭の自宅は琵琶湖畔にあったので、湖岸を歩いたのであろう。 ○雨痕 雨の降った痕跡。楊万里「飯罷登山」に「花晴れて雨痕を帯ぶ」。 ○蘆葉荻花

アシの葉とオギの花。秋の湖岸の情景。

【通釈】 わが老友の隱宅は、水辺の西側の村にある。ここら一带の湖岸は明るい光に照らされて、雨上がりの痕跡を帯びている。アシの葉やオギの花が茂る、すばらしい秋の日だ。と、釣り舟の横たわるところに柴の戸が見えた。

【余説】 大沼枕山は「直到門前溪水流之境、或非無之、然主人皆俗、不足訪也。唯此主人能詩、則恍然為唐詩中之人

也（直到門前溪水流の境、或いは之無きに非ざるも、然ども主人皆俗ならば、訪ふに足らざるなり。唯だ此の主人詩を能くす、則ち恍然として唐詩中の人為るなり）」と評している。楠亭がどのようなところに住んでいようが関係なく、詩をよくする風流人であり、唐詩中の人物のようだからこそ、黄石はたずねていったのである。

0127（其二）

虚窓一面对空明

きょそう いちめんくうめい たい  
虚窓一面对空明 対す

隔岸遠巒秋黛横

きし へた えんらん しゅうたいよこ  
岸を隔てて 遠巒 秋黛横たはる

且看餘霞散成綺

しほら み よか さん  
且く看る 餘霞散じて綺を成すを

令人漫憶謝宣城

ひと まん しやせんじょう おも  
人をして 漫に謝宣城を憶はしむ

七言絶句 韻字 明・横・城（下平声八庚）

【題意】 連作の二首目。楠亭の自然豊かな隱宅から、夕焼けを眺めていると、謝朓の詩句が想起された。

【語釈】 ○虚窓 人のいない窓。 ○空明 広々として、明るい空間。ここでは、窓のそばの湖面をいう。 ○秋黛横

秋の夕暮れの青黒色が広がっている。王維「崔湊陽兄季重前山興」に「千里黛色横たはる」。 ○餘霞散成綺 夕焼けに染まる雲が散り散りとなって、あやぎぬのような縞模様を呈している。ここは、謝朓「晚登三山還望京邑詩」の「餘霞散じて綺を成す」をそのまま用いた。 0105 詩参照。 ○謝宣城 南朝齊の謝朓。宣城郡太守に任

じられたことから、謝宣城と称された。

【通釈】 人気のない窓は、広々として明るい湖面に向き合っている。岸の向こうの遙かな峰には、秋の黛色が横た

わっている。夕焼けに染まる雲が散り散りとなって、あやぎぬのような縞模様となっているのを見つめていると、



何とはなしに謝朓の詩句が想起された。

【余説】 小野湖山は「楠亭湖上隠君子也。余亦曾訪其幽居、居留三日。読三絶句、追想往事、為之愴然（楠亭は湖上の隠君子なり。余も亦た曾て其の幽居を訪ひ、居留すること三日。三絶句を読み、往事を追想し、之が為に愴然たり）」と評している。

0128 (其三)

山水幾人能始終 山水幾人か能く始終せん

紅塵白鳥跡難同 紅塵白鳥跡同じうし難し

釣竿未敢落吾手 釣竿未だ敢て吾が手に落ちず

羨汝忘機儔海翁 羨む 汝 忘機 海翁に儔たるを

七言絶句 韻字 終・同・翁（上平声一東）

【題意】 連作の三首目。楠亭の退隠生活に羨望のきもちを抱いた。

【語釈】 ○始終 はじめからおわりまでを全うする。 ○白鳥 カモメやコハクチョウを指す。白鳥は「海翁好鷗」

（『列子』黄帝）以来、脱俗を象徴する鳥。0004詩・0089詩参照。 ○釣竿 釣り竿。隠者の象徴。 ○汝

あなた。楠亭のこと。 ○忘機 たくらみの心を忘れる。「海翁好鷗」では、海上の翁に「機」がなければ、カモメ

は飛び去らず、捕まえてやろうという「機」があると、カモメは飛んで降りてこなかった。 ○儔海翁 楠亭は海

上の翁と同類である。楠亭が「機」を忘れた隠者だということ。

【通釈】 どれくらいの人が山水の自然にずっと囲まれて過ごせるだろうか。都会の俗塵と脱俗を象徴する白鳥とは、

同じ舞台には立てないものだ。釣り竿を手に取つての隠遁暮らしにはなかなか踏み切れぬものだ。たくらみの心を忘れ、海上の翁の仲間入りをされたあなたのことがうらやましくてしかたがない。

## 0129 月中露坐（月中露坐）

苔階経雨峭涼生

苔階 雨を経て 峭涼 生ず

簾展波紋坐月明

簾は波紋を展べて 月明に坐す

河影欲流秋已好

河影 流れんと欲して 秋 已に好く

露光纔重夜偏清

露光 纔かに重なりて 夜 偏へに清し

逝年不貸徒催老

逝年 貸さず 徒だ老を催す

造物無私豈冀荣

造物 私 無く 豈に榮を 冀はんや

且把焦桐寄冥思

且く焦桐を把て 冥思を寄す

一行弾動古今情

一行 弾動す 古今の情

七言律詩 韻字 生・明・清・榮・情（下平声八庚）

【題意】 嘉永三年秋の作。濡れ縁にて月を見て、感慨にふけた。「露坐」は屋根のないところに坐ることをいう。

【語釈】 ○苔階 苔の生えた石段。縁側に付随する沓脱ぎ石・踏み石のことであろう。 ○峭涼 身にしみる寒気。

趙翼「夢中」に「峭涼新たに入りて衾の単なるを覚ゆ」。○簾 竹や籐で編んだ敷物。雨に濡れていたから、竹むしろを敷いたのである。○展波紋 敷いた竹むしろが、波紋のような模様をなしているということ。欧陽澈

「朝宗和復次韻答之」に「酔ひて眠る 蕈簾の波紋を展ぶるに」。竹むしろの編み目は、その涼しげな性質と相俟つ

て「波紋」「水紋」と表現される。李益「写情」(「三体詩」)に「水紋の珍章 思ひ悠悠たり」。○露光纒重 雨の

露に反射した光がちようど重なった。劉禹錫「謝寶員外旬休早涼見示詩」に「露光初めて重なつて槿花稀なり」。

○不貸 一刻の猶予も与えてはくれない。○造物無私 創造主はえこひきしない。頸聯は、陸游「幽居三首

(二二)の「流年貸さず人皆老い、造物私無く我自り窮す」を意識するか。○焦桐 琴をいう。焦尾琴に同

じ。0026詩参照。○冥思 心の奥深くの思い。また、瞑想すること。朱熹「次子厚秋懷韻」に「冥思して物

の変ずるに感ず」。○一行 一本の琴弦。「行」は、並んでいるものの数量詞。○古今情 過去・現在に去来す

る種々の思い。

【通釈】 苔の生えた踏み石は、雨に濡れて、寒さが身にしみるようだ。水紋のような模様の竹むしろを敷いて、月明かりのもとに坐している。天の河が流れんとするこの秋はまさにすばらしいかぎり、露に反射した光がちようど重なつて、夜はいいようもなく清らかである。過ぎ去つた歳月は猶予の時間など与えてくれず、ただ年を取るようにならざるに過ぎない。創造主に私情があるはずもないので、榮耀を求めるつもりもない。しばらくこの琴にわが心の内を寄託しよう。一本の琴弦によつて、過去・現在に去来して解きほぐせぬ種々の思いを弾き鳴らした。

0130 草書歌。送牧野天嶺東帰。并引(草書の歌。牧野天嶺の東帰するを送る。并びに引)

天嶺寓吾藩一歲餘。其將東帰也、餞予芹水別墅。是日、天氣晴朗、山水澄爽、天嶺酣暢之餘、揮筆如飛。鳳舞龍

跳之妙、与風景之美、足以相発揮。挙座嘆称不已。於是余与諸客、各作詩若文、哀為一卷。以為贖。天領旅次孤

灯之下、試展此卷、則鷗鷺之盟、宛乎在眉睫間。会者中川漁村、広瀬濤堂以下凡十五人。于時庚戌中秋前三日也

(天嶺 吾が藩に寓すること一歲餘。其の將に東帰せんとするや、予が芹水別墅に餞す。是の日、天氣晴朗、山水

澄爽、天嶺酣暢の餘、揮筆飛ぶが如し。鳳舞ひ龍跳ぶの妙、風景の美と、以て相発揮するに足る。拳座嘆称して已まず。是に於て余諸客と与に、各おの詩若しくは文を作り、哀めて一卷と為す。以て驢と為す。天嶺旅次孤灯の下、試みに此の巻を展ぶれば、則ち鷗鷺の盟、宛乎として眉睫の間に在り。会する者は中川漁村、

広瀬濤堂以下凡そ十五人。時に庚戌中秋前三日なり

大唐頭張醉素死後一千年

大唐の頭張 醉素死して後一千年

後代誰能繼其醉与顛

後代誰か能く繼がん其の酔と顛と

繼之者我菱翁乎

これを繼ぐ者は我が菱翁か

翁之狂筆自通天

翁の狂筆 自ら天に通ず

一飲百杯神転王

一飲百杯 神転た王んなり

風雨忽從毫端旋

風雨 忽ち毫端より旋る

有時一字兩字大如斗

時有つて一字 兩字大いさ斗の如し

長蛇鬱律橫林藪

長蛇 鬱律として 林藪に横たはる

有時縱橫揮尽数千張

時有つて 縱横に揮ひ尽くす 数千張

群松偃蹇連岡阜

群松 偃蹇として 岡阜を連ぬ

排拶瀾騰勢益雄

排拶 瀾騰 勢ひ益ます雄たり

状与神龍戰野同

状は神龍の野に戦ふと同じ

更有一種之情趣

更に一種の情趣有り

飛花散雪乱春空

飛花散雪 春空に乱る

菱翁絶藝難再視

人間又見天嶺子

廿歳随翁授妙訣

筆鋒勁利干莫似

八月天涼白雁横

遠山遥水帶秋清

野堂会客客雲集

送子東帰万里行

蜀素与呉牋

歙州一大硯

醉來提筆睨乾坤

為我一掃作龍變

風雲陣発愁魑魅

唯看霹靂声中飛閃電

君然擲筆連声号

逸気尚压秋旻高

満堂詞客皆歎賞

持比菱翁有餘豪

菱翁の絶藝 再び視難きも

人間 又見る 天嶺子

廿歳翁に随ひて 妙訣を授かる

筆鋒 勁利にして 干莫に似たり

八月 天涼しくして 白雁横ぎる

遠山 遥水 秋清を帯ぶ

野堂 客を会し 客 雲集す

子の東帰 万里の行を送る

蜀素と呉牋と

歙州の一大硯

酔ひ來たつて 筆を提げ 乾坤を睨み

我が為に一掃して 龍変を作す

風雲 陣発して 魑魅を愁はしむ

唯だ 看る 霹靂声中 閃電の飛ぶを

君然として 筆を擲ち 連声号ぶ

逸気 尚ほ 秋旻を 压して 高し

満堂の 詞客 皆歎賞す

持して 菱翁に 比すれば 餘豪有り

嗟哉天嶺墨狂有如此

嗟哉あへてんれい天嶺てんれいの墨狂ぼくきやう此かくの如ごとき有あり

他日捲起東海万丈黑雲濤

他日たじつ捲まき起おこせ東海とうかい万丈ばんじやうの黑雲濤こくうんとう

雜言古詩

韻字

年・顛・天・旋(下平声一先)、斗・藪・阜(上声二十五有)、雄・同・空(上平声一

東)、視・子・似(上声四紙)、横・清・行(下平声八庚)、牋・硯・變・電(真部通押)、号・高・豪・濤

(下平声四豪)

【題意】

嘉永三年八月一二日、一年あまり彦根藩に滞在した牧野天嶺が、このほど東帰することになったので、芹水

莊にて送別会を開いた、そのときの作。「草書歌」は、樂府の一体である歌行に属し、李白、任華、皎然、戴叔倫、貫休、黃庭堅、陸游らの作がある。本作もこれらの流れを汲むもので、かれらから詩語や着想を取り入れながら、送別会で天嶺が披露した草書体の書を称えた。牧野天嶺は、巻菱湖の俊足として知られる書家。若き日の依田学海が築地にあつたという天嶺の書塾に入ったのが嘉永四年のことだから、天嶺はこの後、江戸に向かったのだろう。引(詩序)によれば、天嶺の送別会には、彦根藩儒の中川漁村(一七九六—一八五四)や広瀬濤堂(0012詩參照)ら一五名が参集し、かれらが制作した詩文を一巻にして、餞別にしたという。小野湖山は、この引に対して、「読小序教行、天嶺得意之面目可想。天嶺及其兄甲山一峯、皆余旧識也。今無一存者。思之亦不免愴然(小序教行を読めば、天嶺得意の面目想ふべし。天嶺及び其の兄甲山・一峯は、皆余が旧識なり。今一も存する者無し。之を思ひて亦た愴然たるを免かれず)」と評語を書き入れている。

【語釈】

○顛張

唐代の書家、張旭のこと。酒を好み、酔えば髪に墨をつけて書いたので、張顛と称された。

○醉素

唐代の書家、懷素のこと。酒を好み、酔って書き散らした草書は、書法に拘泥しない奔放な書体(「狂草」)であった。懷素は張旭と併せて、「顛張醉素」(あるいは「張顛狂素」と称された。蘇軾「題王逸少帖」に「顛張醉素兩

秃翁、世好を追逐して書工と称せらる」。○菱翁 卷菱湖（一七七七〜一八四三）。貫名海屋、市河米庵とともに幕末の三筆と称された。天嶺はかれの門弟である。○狂筆自通天 自由闊達、ほしいままに揮う筆づかいは、天界に通じるほどの高みにある、の意。孟郊「送草書獻上人帰廬山」に「狂僧酒を為さざるも、狂筆自ら天に通ず」。○一飲百杯神転王 ひとたび飲酒すれば百杯におよび、精神はますますさかんとする、の意。『莊子』養生主に「沢雉は十歩にして一啄し、百歩にして一飲す。樊中に畜はるるを斬めざるは、神王なりと雖ども、善からざればなり」とあるのを踏まえた。キジが百歩に一口水を飲むような窮乏生活をしていても、籠に飼われるのを求めないのは、食料が十分に与えられて精力旺盛になったとしても、精神が窮屈になるからだ、というのを反転させて、卷菱湖は飲めば飲むほど精神がのびやかになって、筆が乗ったということ。○風雨忽從毫端旋 雨風が筆先から巻き起こる。郭祥正「和公扨觀李煜書法喜禪師碑」に「書を作せば本末を究め、風雨毫端より生ず」。○有時 あるときには。皎然「張伯高草書歌」には「時有つて凝然として筆空しく握り、情は寥天 独飛の鶴に在り。時有りて取勢して気更に高く、憶ひ得たり 春江千里の濤」とあって、黄石はここから「有時」を重ねて用いる着想を得たか。○一字兩字 一文字あるいは二文字の書。この前後のくだりは、任華「懷素上人草書歌」の「十栝五栝意に解せず、百栝已に後に始めて顛狂。一顛一狂 意気多く、大叫 一声 起ちて臂を攘ふ。揮毫すれば 倏忽たり 千万字、時有りて 一字 兩字 長さ丈二。翁として長鯨の潑刺として海島を動かすが若く、歛として長蛇の戒律 深草を透るが若し」を意識するか。○大如斗 字の大きさが一斗升ぐらいある。李白「草書歌行」に「一行数字 大いさ斗の如し」。○鬱律 山がうねうねと屈曲して続く様。○数千張 数千枚の紙。李白「草書歌行」に「吾が師 醉後 繩牀に倚り、須臾にして 掃ひ 尽くす 数千張」。○假蹇 高くそびえる様。任華「懷素上人草書歌」では、懷素の書く文字を「天矯 假蹇として、蒼穹に入らんとす」と形容しているが、これを意識するか。○

排撈瀾騰 押し迫って、ぶつかってわきたつ。闊達な書についていう。韓愈「辛卯年雪」に「崩騰して相排撈し、龍鳳交ごも横飛す」。貫休「観懷素草書歌」に「勢ひ崩騰して止むべからず」。○神龍戦野 龍が原野で戦う。文字の形状を龍に譬えた。陸游「草書歌」の「神龍野に戦ひて昏霧腥し」を踏まえる。○飛花散雪乱 花や雪が空に舞い飛ぶ。文字の形状を花や雪になぞらえた。李白「草書歌行」の「落花 飛雪 何ぞ茫茫たる」に拠った。

○勁利 かたくとがっていること。蘇頌「次韻蘇子瞻題李公麟画馬図」に「筆画 勁利にして 刀錐の如し」。○干莫 干将と莫邪の総称。いずれも名劍の名。任華「懷素上人草書歌」に「鋒芒 利きこと 欧冶の劍の如し」とあるのは、筆法の鋭さを名劍になぞらえた用例で、これを意識した。○八月天涼 秋八月の涼しくなるころおい。李白「草書歌行」の「八月 九月 天氣涼し」に依拠した措辞。○野堂 郊外の住まい。芹水莊を指す。○蜀素与呉牋 四川で作られた書道用の白い絹帛と呉の名産の箋紙。陸游「草書歌」に「呉牋 蜀素 人を快にせず、付与せよ 高堂三丈の壁」。○歙州一大硯 歙州産の大きな硯。江西省婺源歙溪の名産の硯。水成岩で作られる歙州の硯は逸品として知られる。李白「草書歌行」に「牋麻 素絹 数箱に排し、宣州の石硯 墨色光る」とあるのは、紙と硯を用意したくだりで、この一聯はこれを意識するか。○提筆 筆を握ること。一句は、陸游「草書歌」の「今朝 醉眼 巖電爛たり、筆を提げ 四顧すれば 天地窄し」を意識するか。○龍変 龍が様々に姿を変えるように、神奇変化を見せること。ここでは、天嶺の書く文字が様々に躍動していることをいう。○風雲陣発愁魑魅 風や雲が間歇的に巻き起こって、物の怪を喚かせる、の意。天嶺の筆端からは一種異様の氣勢が生じたのである。この一句は、皎然「張伯高草書歌」の「風雲 陣発して 鍾王を愁へしむ」を踏まえる。○霹靂声中飛閃電 かみなりが轟くなかで稲光が走る、の意。貫休「観懷素草書歌」の「閃電 光る 辺 霹靂飛ぶ」を踏まえる。○杳然 甲高く叫ぶ声の形容。李流謙「宿永年鎮僧居」に「夜深けて 山鬼 声 杳然たり」。○逸氣 超俗の氣。天嶺の書家として



の風格、気概。 ○秋旻 秋の天。 ○餘豪 あとまで残る豪胆の氣。 ○捲起 巻き上げる。巻き起こす。米芾「智衲草書」に「筆鋒 巻き起こす 三峽の水」。

**【通釈】** 大唐の書家張旭と懷素が死して一千年。後代、だれがその酔と顛とを継承しえようか。これを継承するのは、われらが巻菱湖翁であろうか。翁の奔放な筆跡は天界に通じるほどの高みにある。一たび飲めば百杯を尽くさずではやまず、精神はますます躍動し、その筆先からはたちまち雨風が生じるのだった。あるときには、一文字あるいは二文字の書を一斗升ほどの大きさに書けば、あたかも長蛇がうねうねと數に横たわるかのよう。あるときには、思いのままに数千枚を書き散らすのだが、それは立ち並ぶ松が高くそびえた岡をいくつも列ねたようなものがあった。紙のうちで文字が押し迫って、ぶつかってわきたち、その筆勢はいよいよ雄壮なものとなって、原野で戦う神龍と同じような様相を呈している。しかも一種の情緒もそなわっていて、春の空に舞い散る花や雪を思わせるのである。菱湖翁の絶品の書藝はふたたび目にするにはむずかしいと思われたが、この世界に天嶺君があらわれた。二〇年間、菱湖翁に付き従って、書道の蘊奥を究められた、その筆鋒は干将と莫邪の名剣かとみまごうばかりの鋭さである。八月の冷涼なる空に白雁が横ぎるころおい、遠くの山も水もすがすがしい秋の氣配を帯びだした。わが芹水荘に客人を招けば、騷客たちが雲のわきおこるように入集して、遠く東国に帰らんとする天嶺君を送別しようというのである。蜀素と呉牋、それに歙州の大きな硯が用意された。天嶺君は酔いが回ってくると、筆を手にとって大地を睥睨し、われわれのためにさっと筆を掃いて、飛龍のごとき神奇変化の書を披露してくれた。その妙技によって、風雲が間歇的に巻き起こり、物の怪を喚かせた。われわれが目にしたのは、かみなりが轟くなかでほとばしる稲光だけであった。筆を投げ捨てると、いくたびも甲高い声を挙げたが、その超然たる氣勢は秋の天を圧するほどの高みにあった。座敷中の文人墨客はこぞって嘆賞したものである。菱湖翁と比して、後々までも残る

豪気に富んでいるのだ。ああ、天嶺君の度外れた書藝は、以上のようなものである。万丈の高さにも達する黒々とした波を、いつか東国の海に捲き起こしてくれよ。

【余説】小野湖山は「一起快甚（一起快甚だし）」、「説到飛花散雪、知菱翁之深者（説きて飛花散雪に到る、菱翁を知ることの深き者なり）」、「一転妙甚（一転妙甚だし）」と書き入れている。大沼枕山は「余前歲訪君於桜田邸舎、天嶺寓焉。竟陪侍至于彦根城。蓋以君賞遇之渥、其久滯及一歲者也。天嶺醉後似菱翁之狂。而其書之正不似其人。菱翁門下之傑、為蔣塘・秋巖・雪城。然三子皆不得其正。蔣塘奇詭、秋巖怪勁、雪城輕俗、雖一時成大家、實不及天嶺。天嶺早死、不得起万丈濤於東海。今日憶之、固為可惜。而菱翁之派絶矣。東京之大、無一善書、余每成浩歎。故附録於此云（余前歲君を桜田邸舎に訪なひしとき、天嶺寓せり。竟に陪侍して彦根城に至る。蓋し君の賞遇の渥きを以て、其の久滯一歲に及ぶ者ならん。天嶺醉後菱翁の狂に似たり。而ども其の書の正其の人に似ず。菱翁門下の傑、蔣塘・秋巖・雪城と為す。然ども三子皆其の正を得ず。蔣塘の奇詭、秋巖の怪勁、雪城の輕俗、一時大家と成ると雖ども、実は天嶺に及ばざるなり。天嶺早くに死し、万丈の濤を東海に起こすを得ず。今日之を憶へば、固に惜しむべしと為す。而して菱翁の派絶えたり。東京の大にして、一の善書も無し、余毎に浩歎を成す。故に此に附録すと云ふ）」と述べている。これによれば、天嶺は嘉永二年の夏まで江戸の彦根藩邸に身を寄せており、その後、黄石とともに彦根にやってきたようだ。大竹蔣塘、萩原秋巖、中沢雪城が菱湖の高弟として知られるが、枕山は、菱湖の書体を正しく継承しているのは天嶺のほうだと高く評価し、その早逝を惜しんでいる。

## 0131 新涼（新涼）

郊墟收積雨

郊墟積雨収まり

林木動涼颯

りんぼくどうりょうしやく  
林木涼颯に動く

鳴蛩依莎草

めいきよういさそう  
鳴蛩は莎草に依り

疎星蘸野池

そせいせんやち  
疎星は野池に蘸る

坐懷千載上

ざわいせんざいじやう  
坐りに懷ふ千載の上へ

讀到五更移

よみたごころごころ  
讀みて到る五更の移

今我豈愁独

こんがあひびと  
今我豈に独りを愁へんや

昔賢云有師

せきけんこころしあ  
昔賢云に師有り

幾人安命分

いくにんあめいぶん  
幾人か命分に安んぜんや

拳世苦心思

けんせいしんし  
拳世心思を苦しめしむ

富貴原難覓

ふうきげん  
富貴原より覓め難し

功名不可期

こうめいふか  
功名期すべからず

流年争肯貸

りゅうねんいか  
流年争でか肯へて貸さんや

造物固無私

ぞうぶつこころな  
造物固より私無し

誰念一腔血

たれおもいつくさ  
誰か念はん一腔の血の

化成双鬢糸

かしてそうびんし  
化して双鬢糸に成らんとは

且怡存眼力

しばらよろこび  
且く怡ふ眼力を存して

得及課書時

かじよとく  
課書の時に及ぶを得たるを

五言排律 韻字 颯・池・移・師・思・期・私・糸・時 (上平声四支)

【題意】 嘉永三年（五年）の秋の作。秋になってはじめて涼気を感じるころ、夜の明け初めるまで読書にふけた。

【語釈】 ○郊墟 郊外の村里。韓愈「符読書城南」（『古文真宝』前集）には、読書に格好の時期として「時秋にして

積雨霽れ、新涼郊墟に入る。燈火稍や親しむべし、簡編卷舒すべし」とある。この一聯は、これを踏まえている。○涼颼 ずずしい風。○莎草 ハマスゲ。○千載上 一〇〇〇年より以前のできごと。陶淵明「贈羊長史

并序」の「千載の上を知るを得るは、正に古人の書に頼る」を踏まえた。○五更移 五更（午前四時頃）になら

んとするころおい。○命分 運命。めぐりあわせ。○流年争肯貸 流れ去る年月は一刻の猶予も与えてくれな

い、の意。この一聯に同趣の内容を、すでに黄石は「逝年貸さず 徒だ老を催す、造物私無く 豈に榮を冀はんや」

（00129詩）と詠じている。○一腔血 全身の血液。○眼力 視力。劉禹錫「閒坐憶樂天以詩問酒熟末」に

「書を減じて眼力を存す」。○課書 日課の読書。

【通釈】 郊外の村里では降り続いた雨が収まり、林の木々はすずしい風に揺れ動かされている。秋の虫はハマスゲに隠れてすだき、まばらに光る星々は野にある池に映っている。一〇〇〇年も昔のできごとにそぞろに思いを馳せながら、夜明け前まで読書にふけている。現在に生きる私はどうして孤独を嘆くことがあるのか。過去の賢人という師匠がついてくれているのだ。おのれの運命に満足しているものなどどれほどいるだろうか。だれもかれも心を苦しめているのである。富貴は端から求めがたく、功名など期待できそうにない。歲月は一刻の猶予を与えることなく流れ去り、創造主はもとよりえこひいきなどしない。だれが予期しただろうか、全身を駆け巡る血液が、形を変えて薄く白い両鬢になろうとは。さしあたりうれしいのは、いまだ視力が衰えず、日課の読書の時間を持てることぐらいか。

【余説】 大沼枕山は「郊墟四句、善模韋柳（郊墟の四句、善く韋柳を模す）」と評して、冒頭四句が韋応物、柳宗元

を模したものと見方を示している。小野湖山は「意境深徹、淡中有味（意境 深徹、淡中に味ひ有り）」と評している。

0132 水村即事（水村即事）

節近秋成風雨多

節は秋成に近づきて風雨多し

豊凶今年定如何

豊凶今年定めて如何

朝来湧溢陂塘水

朝来湧溢す陂塘の水

没我公田傷我禾

我が公田を没して我が禾を傷つく

七言絶句 韻字 多・何・禾（下平声五歌）

【題意】 嘉永三年（五年）の秋の作。水辺の集落における眼前の景を詠じた。大雨によって、収穫間際の稲が損なわれた農民のきもちに想いをいたした。

【語釈】 ○秋成 秋のみのり。収穫。 ○湧溢 あふれ出る。こと。 ○没我公田傷我禾 私たちの公田が水没して、

さらに私の私田の稲が損なわれる、の意。「公田」とは、井田法による公有の田地のこと。九〇〇畝の田地を井字に画し、八家に一〇〇畝ずつの私田を与えて耕作させる。残りの中央の一〇〇畝は公田として八家共同で耕し、これを租税として納めさせた。この一句は、『詩経』小雅「大田」にある「我が公田に雨ふりて、遂に我が私に及ぶ」を踏まえる。こちらは、恵みの雨が公田や私田に及んだことを、農民がよるこんだ用例だが、これを反転させて、大雨によって稲が損なわれた悲哀を、農民になり代わって詠じた。

【通釈】 秋の収穫時期をひかえて、雨の降ることおびただしい。豊作か凶作か、今年はいったいどうであろうか。朝

から堤防の水があふれ出して、私たちの公田が水没して、私の私田の稲が損なわれてしまった。

0133 贈龜六齋龜六齋者越中高岡人。善彫刻、隨物鑿形。究極工巧。最妙於風凰。（龜六齋なる者は越中高岡の人なり。彫刻を善くし、物に）

万象従心巧作章 ばんしやうこころしたが 万象 ばんしやう 心に従ひて巧みに章を作す

便知造化掌中藏 すなは 便ち知る造化掌中に藏するを

争能将我彫虫技 いかに 争でか能く我が彫虫の技を將て

比爾寸刀鐫鳳凰 なんぢすんとう 爾が寸刀の鳳凰を鐫るに比せんや

七言絶句 韻字 章・藏・風（下平声七陽）

【題意】 嘉永三年（五年）の作。龜六齋に寄せた作。自注によれば、龜六齋は越中高岡の彫刻家で、もつとも鳳凰を得意としたというが、詳細は不明。

【語釈】 ○万象 ありとあらゆるもの。すべての事物。 ○作章 彩り豊かなかたちをなす、の意。龜六齋が、木材

を彫りだして、あらゆる物象を自由自在に表現できるといふこと。「章」は、区切りであり、かたちであり、美しい模様のこと。 ○彫虫技 虫書（秦の八体書の一。虫の形に似た書体）を彫るように、むやみに表現を飾り立てる

ことを卑しめていふ言葉。詩文についていふ。楊雄は子供のときに辞賦を好んだが、それは「彫虫篆刻」のようであつたと反省した故実（『法言』吾子）に拠る。李白「与韓荊州書」（『古文真宝』後集）に「恐らくは彫虫の小伎、

大人に合はざらんことを」。 ○寸刀 彫刻刀。

【通釈】 あらゆる物象は、心のままにかたちづくられ、たくみに文目をなす。すぐにわかった、そなたの掌中には万物生成の力が隠されているのだと。わが輩の、虫のかたちを刻むような、つまらぬ詩歌の技術など、彫刻刀によつ

て鳳凰をも生み出すそなたの力とはくらべものにならんよ。

0134 九月菊花未開（九月菊花未だ開かず）

今歳久残熱 こんさいひさしくざんねつ  
今歳久しく残熱あり

秋風菊較遅 しゅうふうきくかくやおそ  
秋風菊較や遅し

忽逢佳節至 たちまちかせついたるに逢ふも  
忽ち佳節の至るに逢ふも

未見一花披 いまいつかひら  
未だ一花の披くを見ず

薄醉聊舒興 はくすいりょうしゅうきよう  
薄酔聊か興を舒はし

微嗟欲伴誰 びくさんたれ  
微嗟誰をか伴はんと欲する

晚来殊寂寞 ばんらいしよこせまぼく  
晩来殊に寂寞たり

無意倚東籬 むいよりとうり  
無意倚るに意無し  
東籬に倚るに意無し

五言律詩 韻字 遅・披・誰・籬（上平声四支）

【題意】 嘉永三年（五年）の九月九日の作。残暑によって菊も咲かぬなか、ひとりさびしく重陽の日を迎えた。

【語釈】 ○残熱 残暑。 ○菊較遅 菊の咲くのがいつもよりやや遅い。杜甫「人日二首（一）」に「春寒花較や

遅し」。 ○佳節 すばらしい節句。ここでは、九月九日の重陽の日を指す。王維「九月九日憶山東兄弟」（『唐詩

選』『三体詩』）に「独り異郷に在りて異客と為り、佳節に逢ふ毎に倍ます親を思ふ」。 ○薄酔 微醺を帯びるこ

と。 ○倚東籬 東の籬に近づく。陶淵明が「飲酒二十首（五）」（『古文真宝』前集）にて「菊を採る 東籬の下、

悠然として南山を見る」と詠じて以降、東籬は菊花の咲くところを指す。

【通釈】 今年はながらく残暑が続いて、秋風が吹くのも菊が咲くのも例年よりやや遅い。またたくまに重陽の節句になったが、いまだ一本の菊花が開くのも見ない。微醺を帯びてすこしばかりきもちがのびやかになったが、小声で詩を口ずさんでも相手になつてくれる者などいない。暮れがたになつてことさらさびしさがつのり、東籬に向かうきもちにもなれない。

【余説】 大沼枕山は「通首四十字一意。五六殊然。古法調、今人集中、不多見之（通首四十字は一意なり。五六殊に然り。古法の調にして、今人の集中、多くは之を見ず）」と評して、一首のいわんとするところはただ一つ（つまり、重陽の日の孤独感を述べるところ）しかなく、これは古風な構成法だと述べている。小野湖山は「後聯自然、得五言妙境（後聯自然にして、五言の妙境を得たり）」と述べて、頸聯に作り物めいたところがないことを評価している。

0135 題九江画蘭竹（九江の画蘭竹に題す）

幽貞勁直旧同参

ゆうてい けいちよく きゆうどうさん  
幽貞 勁直 旧同参

観汝従来契合深

かん み なんぢ じゅうらい けいごう ふか  
観る 汝 従来 契合の 深さを

胸次能持君子節

きょうじ なく ちす くんし せつ  
胸次 能く 持す 君子の 節

筆端写出美人心

ひつたん うちだす びじん しん  
筆端 写し 出だす 美人の 心

七言絶句 韻字 参・深・心（下平声十二侵・「参」は下平声十三覃で隣韻）

【題意】 嘉永三年（五年）の作。青江九江（0124 詩参照）の画いた蘭と竹の図に寄せた題画詩。

【語釈】 ○幽貞 高潔で変わることのない節操。深谷にあって清香を放つ蘭の性質を称えた語。劉克莊「蘭」に



「深林 語らず 幽貞を抱き、頼たのひに微風の遠馨さびを遞たる有り」。○勁直 腰があつて、まっすぐな性質。竹を称えた

語。朱淑真「直竹」に「勁直 忠臣の節、孤高列女の心」。○旧同參 古くからの仲間。「同參」は、同じ師につ

いて參禪することをいう仏教語で、それぞれを「同參」と呼びあつた。○汝 あなた。九江を指す。○契合

割符を合わせたように、心が一致すること。杜甫「投贈哥舒開府二十韻」(『古文真宝』前集)に「策行はれて戦伐

を遺わすれ、契合して 昭融を動かす」。○美人 才幹にすぐれた、高潔な賢人。美女のことではない。「簡兮」(『詩

經』邶風)に「云に誰をか之れ思ふ、西方の美人」。

【通釈】 高潔な節操を備えた蘭と、強くまっすぐな竹とは、あなたにとって古くからの仲間である。これまで蘭竹と

いかに心を通い合わせてきたかが、この画からうかがえる。胸中に君子としての節操をしっかりと保持しているの

で、筆先より高潔な君子の心を描きだせるのだ。

【余説】 小野湖山は「随手結合、不費工夫(手に随ひて結合し、工夫を費さず)」と評している。蘭竹と九江とを自

在につなぎ合わせて無理がないということである。

0136 旭松図 (旭松図)

老幹凌空氣勢高

老幹ろうかん空そらを凌しのいで 氣勢きせう高たかし

常看瑞靄聚雲梢

常つねに看みる 瑞靄ずいあい雲梢うんしやうに聚つどふを

一天光迸紅墩上

一いつてん 光ひかり迸ほとつて 紅墩こうどん上のぼり

照出千年白鶴巢

照てらし出いだす 千せん年ねん白鶴はくかくの巢す

七言絶句 韻字 高・梢・巢(下平声三肴・「高」は下平声四豪で隣韻)

【題意】 嘉永三年（1820）五年の作。朝日の射す老松を描いた図に寄せた題画詩。

【語釈】 ○瑞靄 めでたい雲靄。 ○雲梢 雲に届かんばかりに高く伸びた梢。孫觀「亀潭二首（二）」に「潭影千

峰倒しまに、雲梢万木參る」。 ○一天 空いちめん。 ○千年白鶴巢 千年もの長寿を保つ白鶴が松の梢に作っ

た巢。丁令威が仙術によって白鶴と化し、千年後に家に帰ってきた故実（『搜神後記』卷一）を踏まえる。「東都の龍興觀に古松樹有り。枝偃して倒垂す。相伝へて云ふ、已に千年を経たり。常に白鶴の飛びて其の間に止まる有り」（『太平御覽』木部二「松」所引『西京雜記』）とあるように、松に白鶴の組み合わせは、吉祥図の典型。ただし、実際のツルは松に巢を作らない。

【通釈】 この老松の幹は空を凌がんばかりの勢いがある。いつ見ても、めでたい靄が雲のように高い梢にただよっている。と、空いちめんに光をほとばしらせながら、紅い朝日が昇ってきて、千年もの長寿を保つ白鶴の巢を照らし出した。